

「アメリカ人は前転ができないから受け身の練習より先に、前転の練習が必要。驚きでしたね」



アメリカではコミュニケーションが取れないと孤立してしまう。「今はSNSの時代だと言われますが、SNSのコミュニケーションはワン・ウェイ。私の場合は言葉の壁があるのでとにかく話そう、聞こうと。でなければ理解できなかった」。異文化コミュニケーション、多様性などを実感したのもアメリカだった。

大学の寮ではルームメイトと部屋をシェア。あるとき、勉強が忙しそうなルームメイトを思い、食後の皿洗いを引き受けた。数日後、同様に時間的余裕がなくなった氏が皿洗いを頼めないかと聞くと、「あれは君が好きでやったんだろ。私は何も頼んでいない」と素っ気ない返事。「世の中にはいろんな人がいると思いきりました」

日本には「お互い様」困ったときは相身互いの精神がある。ただ、それは万国共通ではなかった。アメリカの大学は入学希望者には

門戸が広く開かれているが、入学後が厳しい。中退が多いのも特徴で、卒業できる学生は入学時の2〜3割。さらに大学院は進学も格段に厳しい。「大学院に進学したかったので、毎日10時間は勉強していました」。成績優秀で、大学からティーチングアシスタントの声がかかるなど、余裕ができたため、人生に幅を広げようと寮を出た。車も購入。しかし「一度羽根を広げると元に戻すのは大変で（笑）」。集中的猛勉強に追われた結果、吐血。「たまたま直後に友人が来て、病院に運ばれたので助かったけれど、20分遅れていたらアウトだったと医者に言われました。だから今はお釣りの人生（笑）」

多額の医療費も病院の好意で支払期間を猶予してもらったなど、多くの人たちにサポートされ、事なきを得たことも少なくなかった。「人は一人で生きていくのではないことも学びました」

大学院の修士課程を卒業後、化学メーカーのデュボンに入社。14年に日本法人の取締役名誉会長まで昇り詰めた。

仕事人間のような輪郭しか見えてこない。家庭人としてはどうか。

「長女はグラフィックデザイナー、次女はバレエをやっています。家庭人としては、今は落ち着いてるかな（笑）。社長になる前までは月に2〜3回海外出張だったので、家にほとんどいなかった。奥さんに言わせると、あなたは何もしてなかった。ハイ、ごもつとも（笑）」

どれも大役ばかりの幾つもの肩書きを持つ。それでも「僕はエリートじゃないので。だから頑張れたし周りも助けてくれたんでしょね」と言う。